

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

住谷悦治校閲 青山霞村著 田村敬男編

改訂増補 『山本覺馬傳』

(京都ライトハウス、B6判
四一八頁、二、〇〇〇円)

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門をたたけ、さらば開かれん。」いかなる絶望のどん底にあつても、聖書の示すこの驚くべき楽天主義は、不可能を可能に転換させる。

鳥羽伏見の戦いに敗れ、薩軍に捕えられ、同藩邸に幽閉された会津藩士、山本覺馬は、やがて眼疾が嵩じて全く失明、その

うえ脊髄障害という重複障害者の苦難を荷負う悲劇の人となった。しかし彼はこの受難を却って心眼を開く機会として、勇猛果敢、明治維新の京都に府政顧問あるいは府会議長として、植村知事を助けて教育文化・産業振興・行政改革のひろい分野に縦横の献策を重ね、キリスト者として、まさに求め、尋ね、門をたたいて、非凡の運命を拓く達人の境地を歩み、明治二十五年、「壮烈」というほかに言いようのない六十五年の奮闘の生涯を終ったのである。

同志社人は、若王寺山頂の新島襄先生の墓の傍らに、その協力者山本覺馬翁の墓石を凝視め、「同志社」の命名者、また明治二十三年には同志社臨時総長にも推され、新島襄その人の妻八重子の兄君でもあったこの人物との、縁の浅からぬことを想う。

惜しむらくは、新島先生に就いて学ぶ同志社人が、学園創立期の重要人物山本覺馬について知るところは、実に少ない。この異色ある達人の精進一路の生涯は、後輩の私どもに、清純にして熱烈なインスピレーションを覚えすには措かぬ。

すでに昭和三年、同志社校友青山霞村氏の筆になる『山本覺馬』の一書が、同志社の源流に立つこの先覚者の人柄を描いて、後輩の活眼をひらくよすがとしたのである

が、文体古風、また入手も容易ではなくなっている。過ぐる年、同志社総長として同志社の歴史に格別の愛着を抱かれ、且つまた京都ライトハウス理事長として、社会福祉に篤い心を寄せてこられた住谷悦治博士は、京都社会福祉界にこの人ありと知られるライトハウスの田村敬男氏と相談され、霞村執筆の山本覺馬の現代版を世に問う決意をなされたのである。

深尾千代子姉の現代文への書き替え、田村氏の新たな苦心の資料蒐集、同志社人文研の篤学杉井六郎氏の補遺篇および年譜のまとめ、その他の多くの人々の努力によって、ここに新体裁を整えた本書発刊の運びに至った。

創立百周年記念のときを終えて、同志社は本書の出版によって、その重厚真摯の伝統に一段と光輝を増し加えたと言うべきである。

同時に又、わが国の奮闘の身障者列伝のなかでも特に異彩を放つこの書を手にして、全国の身障者自身、また多くの福祉関係者は、三重苦の聖女ヘレン・ケラー伝にも劣らぬ感激の書が、斯くもわれわれの身近かに存することに、無上の励ましを感じずるに違いない。

(嶋田啓一郎・大学文学部教授)

岡本昌夫訳

『英国象徴詩風』

(金星堂、B6判
一八五頁、一、五〇〇円)

『英国象徴詩風』は、ルイ・カザミアン著『象徴主義と英詩』の訳者が、病苦と闘いながら十年の歳月をかけて上梓した訳詩集である。したがって、前者と後者は親子関係にあると言ってよい。つまり、前者上梓の発想は、後者の主題の論拠となった実例を象徴主義作風の系譜図として読者に提示することにある。後者において、カザミアンが意図した主題は、十八世紀から二世紀半にわたる英詩の実例を十二分に駆使しながら、象徴主義作風を跡づけることにあった。

さて、両者の構成は、必然的に相似の体裁をとらざるを得ない。後者では、象徴主義の定義とイギリス象徴主義の由来を論じるために、はじめの二章を割いているが、それ以後は、前者、後者とも、十八世紀、ローマン主義、ヴィクトリア王朝の詩、新

ローマン主義、現代詩とそれぞれ独立させた上で系譜を作っていた。

カザミアンによれば、象徴とは「言語」の持つ含蓄を大いに利用して、精神全体に作用させるものであり、この手法を利用する作風が象徴主義作風ということになる。しかし、象徴という技巧を用いければ象徴主義作風になると短絡しないことを読みとるべきであろう。そこで、カザミアンは象徴主義作風とは暗示法を用いる詩だ、と言葉を改めている。

象徴主義作風の実例を取捨選択する時、後者では論理の展開上必然的に抜粋を強いられているが、前者では、「抜粋したもの」を完全な形にし、長詩に於てはなるべくまとまった形にして「収録されている。さらに、ブレイクの「ユリゼン」のように後者で収録されながら、前者では割愛されたり、逆に、例えばコルリッジの「失意のオード」のように、後者には言及されていないが、前者には「本邦初訳」と明記して収録されているものもある。

訳語の選択は適切で、現代語が用いられ、新体詩流の言葉が雅語として響きがよくと考える術^ていがなく、すがすがしい。それでいて、玲^{れい}ろ^う、とことわの、はたと、たおやかな、おとない、こよなく、たばし

る、くさぐさ、ほろほろ、ゆるゆる、等が文脈の中に溶けこむように用いられているのは心憎いばかりである。さらに、訳風は原詩につかずはなれず、非常に正確である。それは、詩とは「一種の存在の仕方、感じ方、つまりわれわれの心をしっかり捉える内的生命のニュアンス」を伝えるものだ、とカザミアンが指摘しているが、偶然とは言え、S・スペンダーが“the felt presence of an intensely aware individual inner life”と言っているのと通じ、非常に興味深い。訳者自身、この覚めた内的生命のニュアンスを受容しているからこそすぐれた訳詩になっているのである。また、訳者が古稀を記念して、と述べているように、その碩学の学風と決して無関係でなからう。

イギリス・シンボリズムの系譜と象徴主義作風を知るためには、好個の書として大いに利用すべきであろう。

最後に、スインバーンの「見捨てられた庭」よりは抜粋でないから「見捨てられた庭」とすべきであろうし、『英国象徴詩風』と一本として上梓するためには、収録作品の取捨選択及び省略・附加の基準が明確にされているべきではなかっただろうか。

(坂本完春・大学文学部教授)